

LIBRARY

「やさしい猫」

中島京子著(2021年中央公論新社刊)

本作のタイトルは、豊かな自然の中で幸せに暮らすネズミの家族の不思議な運命を描いた、スリランカの童話「やさしい猫」にちなんでいます。

その童話を教えてくれたのは、スリランカ人のクマさん。語り手の女子高生は幼い時に父親と死に別れ、母親と二人で暮らしていました。そこに突然母親より7歳も若いクマさんが現れ、一緒に暮らすようになるのです。本名はとても長くて覚えきれないから、「クマさん」と呼ばれています。

スリランカ人と言えば、今年(2021年)3月名古屋入管で亡くなったウイシュマさんのことが脳裏に浮かびます。「入国管理局」のあり方が大きく問われた事件でもありました。まさに国会で入管法改正が議論されている時期とちょうど重なり、事件の余波もあって、改正案は廃案となりました。街を歩けば必ずどこかで外国人を見かける今日。にもかかわらず、我々日本人の多くは、外国人がどんな立場で日本にいるかをほとんど知りません。

本作では、思いもよらない環境におかれ、当事者に近い関係だからこそわかる女子高生が、入管でのできごとや入管のシステムをととてもわかりやすく教えてくれます。「収容」や「退去強制」、「仮放免」という言葉や状況が一体どういうことを意味するのか。フィクションだからこそ、そして女子高生の視点からだからこそ、容赦なく赤裸々に描かれていますボーイフレンドや幼なじみとのやりとりからも微妙な年ごろの彼女の心の動きが感じられます。

「入管」とは、「在留資格」とは何か。そして「外国人が日本で暮らす」とはどういうことなのかが、自然な流れで描かれています。一方で、日本人が外国人に対して抱く感情もきちんと描かれていて、決してきれいごとではない現実もまたかいま見せてくれます。

最後は、ハッピーエンド。そして、このお話がだれに向けて語られているのかが明かされます。最後の最後に「やさしい猫」の体に包まれるような、本当に穏やかな気持ちになれる小説です。

